



シナダニク
X

体験版

沃姫山（よくのひめやま）の麓に広がる地方都市……沃姫市（よくのひめし）には、シナダリアツメという、他の地域には秘された風習がある。古来より、沃姫山の麓の里……沃姫の里に住まう人々は、沃姫山の山神である……ヨクノヒメという女神を、信仰して来た。

ヨクノヒメを漢字で表記すると、沃之姫……もしくは欲之姫となる。土地を肥沃にして栄えさせる、性欲が強い女神でもあった事を、示す名であるらしい。信仰する地域を栄えさせてくれる代わりに、男の精……つまり精液を捧げる事を求める、淫らな女神なのだ、ヨクノヒメは。

昔はヨクノヒメ自ら沃姫の里に降りて、多数の男達と交わり、精液を集めていた。だが、人の世が進歩し、沃姫の里が沃姫村と呼ばれるようになった明治の頃になると、神が自ら人里に降りるのは難しくなった為、ヨクノヒメは自分の代わりに人間の女性、精液を集めさせる事にした。

その精液を集める女が、シナダリヒメなのだ。シナダリとは、精液を意味する古い言葉。シナダリヒメが男と交わり、精液を集める風習が、シナダリアツメなのである。

シナダリアツメの初期の段階では、シナダリヒメは女が務めていた。だが、自分の妻や娘……恋人などが、村中の男と交わるのを、村の男達は当然、善しとはしなかった。


それ故、明治の中頃……ヨクノヒメを祭る、沃姫神社の当時の神主が、シナダリアツメの風習を、男達の不満が溜まらぬように変えて欲しいと、ヨクノヒメに頼んだのだ。シナダリヒメの役目を、村の女が務めないで済むように。

ヨクノヒメは頼みを聞き入れ、シナダリヒメの役目を村の女ではなく、男が務められるようにした。ヨクノヒメが村の若い男を一人選び、その身体を神の力で、一時的に女に変え、シナダリヒメの役目を務めさせる風習に、シナダリアツメは変わったのである。

今では市となった沃姫市でも、シナダリアツメの風習は続いている。毎年の七月初頭、二十歳前後の若い男が一人選ばれ、女の身体となって、シナダリヒメに任じられる。

神であるヨクノヒメの意志による為、シナダリヒメに選ばれた者は、その役目から逃れられない。本人の意向がどうであっても、三日間続くシナダリアツメの間、多数の男達と交わるのを、避けられないのだ。

そして今年の七月も、十八歳になったばかりの少年が、ヨクノヒメに選ばれて、シナダリヒメの役目を務める羽目になる……。



朝……目覚めた俺は、身体に微妙な違和感を覚えた。だが、目覚めた直後で、半分寝惚けたような状態だった俺は、その違和感の正体には気付かない。

違和感だけでなく、尿意も覚えたので、取り合えず尿意の方をどうにかしようと思った俺は、トイレに向かう。

トイレに入り、ジャージとパンツを下ろして、小便をしようとした時、俺は気付いた。目覚めてから、ずっと覚え続けていた、妙な違和感の原因に。

「……ついてないッ！」


男が小便をする為の大事な物が、股間に存在しない事に、俺は気付いたのだ。夢を見ているのかもしれないと思い、頬を抓ってみるが、痛いので夢ではない。



驚きと抓った痛みのお陰で、寝惚けていた頭も完全に目覚めた。その上で、身体のうちこちを手で触れて確認し、股間からペニスが無くなっているだけでなく、胸が膨らんでいる事にも気付く。

そして、俺は理解する……自分に何が起こったのかを。
「女になってるんだ、俺の身体……」

突然、身体が女になってしまい、パニック状態に陥った俺は、トイレを後にしてキッチンに駆け込んだ。朝食の準備中の母親に、相談する為に。



「母さん！ お、俺……女になっちゃったッ！」
焦り気味の俺に、声をかけられた母親は、エプロン姿で俺の方
を向く。息子が女性化している、本来なら有り得ないような光景
を目にすれば、物凄く驚くのが普通なのだが、母親は大して驚く
様子も無く、言い放った。
「あら、今年のシナダリヒメ、あんたなの！ 選ばれて良かった
じゃない！」

むしろ、息子の身体が女になったのを、喜ぶかのような母親の
言葉を聞いて、俺は思い出す……古来より地元に伝わる不思議な
風習、シナダリアツメの時期、一時的に性別が男から女に変わる、
シナダリヒメの存在を。

そして、これから三日の間続くシナダリアツメの期間、自分が
経験するかもしれない、悪夢のような状況を思い浮かべ、吐き気
がしそうになる程、げんなりとする。

「シナダリヒメに選ばれて、良かったって……。息子が女の身体になって、これから男相手に……。色々と変な事する羽目になるっでのに、良かったは無いだろ、良かったは！」
俺の抗議を、母親は涼しい顔で、平然と受け流す。

「シナダリアツメの間は大変だろうけど、シナダリヒメに選ばれた男は、ヨクノヒメ様のご加護があつて、家族まで含めて一生、無病息災で暮らせるんだから、良かったでしょ」

「いや、でも……。俺、男なのに……。男相手に……。」

不満げに文句を言い続ける俺の言葉を制止し、母親は言った。

「シナダリヒメに選ばれた者が、その役目を果たさないと、沃姫市の皆が神罰で滅ぶと言われているのよ。沃姫市市民と佐藤家の皆の為、我慢して責任を果たしなさい。いいわね明良（あきら）？」
強い口調で母親に言われ、気圧された俺……。佐藤明良は、思わず頷いてしまう。



女になっている間、出来れば高校は休みたかったのだが、それは母親が許さなかった。

「授業サボっても問題無い程、あんたは成績良くないでしょ！少しは受験生の自覚を持ちなさい！」

そう母親に叱責された俺は、朝食をとると、嫌々ながら高校に向かうべく、服を着替える。普段は制服で通っているのだけど、今日はTシャツにジーンズという格好だ。

胸が膨らみ過ぎたり、ウエストが細く……ヒップが太くなったりと、男の時とはスタイルが変わり過ぎてしまった為、普段着ている制服が、身体に合わなくなってしまった。

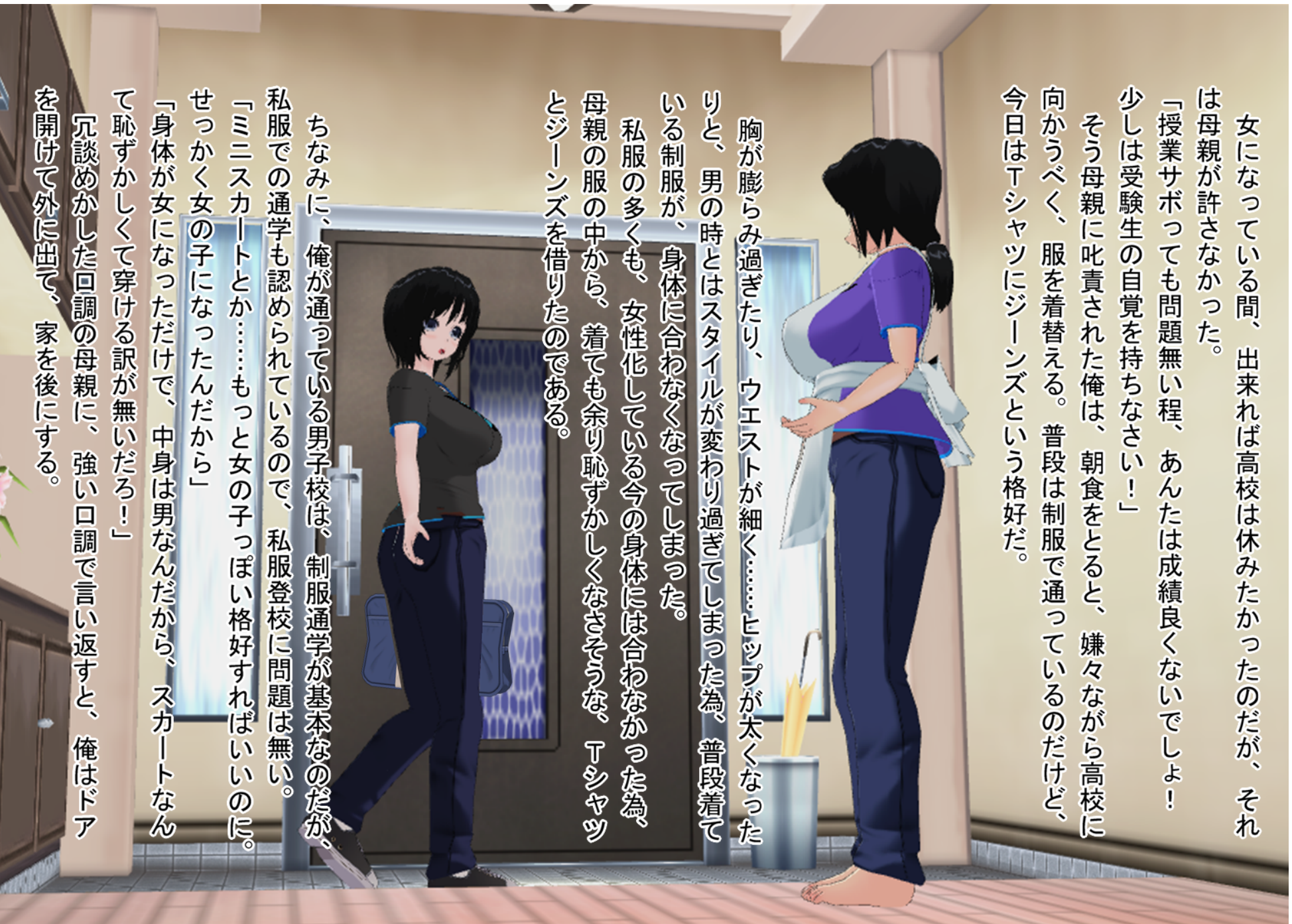
私服の多くも、女性化している今の身体には合わなかった為、母親の服の中から、着ても余り恥ずかしくなさそうな、Tシャツとジーンズを借りたのである。

ちなみに、俺が通っている男子校は、制服通学が基本なのだが、私服での通学も認められているので、私服登校に問題は無い。

「ミニスカートとか……もっと女の子っぽい格好すればいいのに。せつかく女の子になったんだから」

「身体が女になっただけで、中身は男なんだから、スカートなんて恥ずかしくて穿ける訳が無いだろ！」

冗談めかした回調の母親に、強い口調で言い返すと、俺はドアを開けて外に出て、家を後にする。





目覚めてから、色々とゴタゴタしていたせいで、家を出るのが遅れた為、遅刻しそうだった俺は、高校まで走る事にした。

運動は得意で走るのも速いから、余裕で間に合うと思ったのだが、その考えは甘かった。

（何だこれ？ は……走りにくい！）

俺は心の中で、驚きの声を上げる。女になった身体は、男の時とは勝手が違い、妙に走り難いのだ。

すぐに俺は、その原因に気が付く。大きな胸が揺れて、反動でバランスが取れないから、走りにくいのだと。

（ブラジャー着けてくれば、良かったのかも……）

着替える際、母親にブラジャーを着けるように言われたのだが、女物の下着を着けるのは、男として受け入れ難かったので、ノーブラのまま家を出てしまったのである。

揺れる豊かな胸を、ブラジャーで抑えれば、走りにくくなかったのかも、俺は今更、母親の言う事を聞かなかったのを悔む。

（胸が揺れると、乳首の先端がTシャツの布地と擦れて痛いんだけど、ブラを着けていれば、これも防げたのかな？）

自問しながら走る俺の視界に、数人の男達の姿が映る。男達の間線が、揺れる自分の胸に注がれているような気がして、急に恥ずかしくなってしまう俺は、自意識過剰過ぎだよと、自分で自分に言い聞かせる。

結局、俺は遅刻してしまい、教室に辿り着いた時、クラスは朝のホームルームの最中だった。

突如、少女が現れたのに驚き、クラスメート達はざわめく。

「あ……えーっと、俺は……」

自分が佐藤明良である事を、告げようとした時、担任の山本先生が、驚きを隠さない表情で、俺に話しかけてきた。

「お前、佐藤か？ お母さんの方から電話で学校に、お前が今年のシナダリヒメに選ばれて女性化したので、三日間女の身体で通学しますって連絡が入ってたんだが……本当に女になったんだな」少女が女になった俺だと知り、クラスメート達は騒然となる。

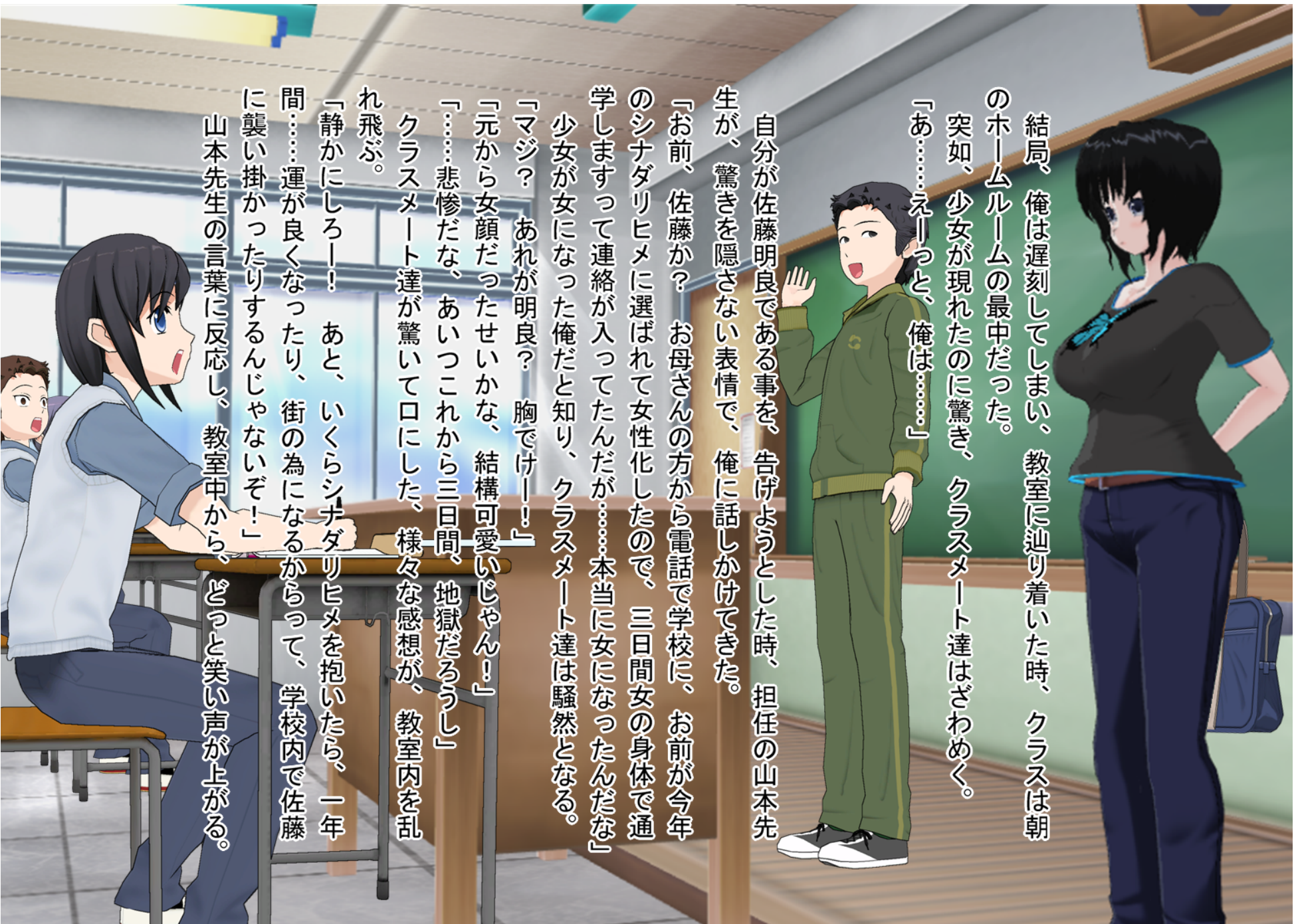
「マジ？ あれが明良？ 胸でけー！」

「元から女顔だったせいかな、結構可愛いじゃん！」

「……悲惨だな、あいつこれから三日間、地獄だらうし」

クラスメート達が驚いて口にした、様々な感想が、教室内を乱れ飛ぶ。

「静かにしろー！ あと、いくらシナダリヒメを抱いたら、一年間……運が良くなったり、街の為になるからって、学校内で佐藤に襲い掛かったりするんじゃないぞ！」
山本先生の言葉に反応し、教室中から、どっと笑い声上がる。



ホームルームの後、授業の間は普段と変わらなかったが、休み時間の間は、興味津々といった感じのクラスメート達に、俺の周りに集まり、質問攻めにした。

「オナニーしたか？ 男より気持ち良いってマジ？」

「もう誰かとセックスした？」

クラスメートの気楽さか、皆が平気で下ネタの質問をしてくる。

もみ

もみ

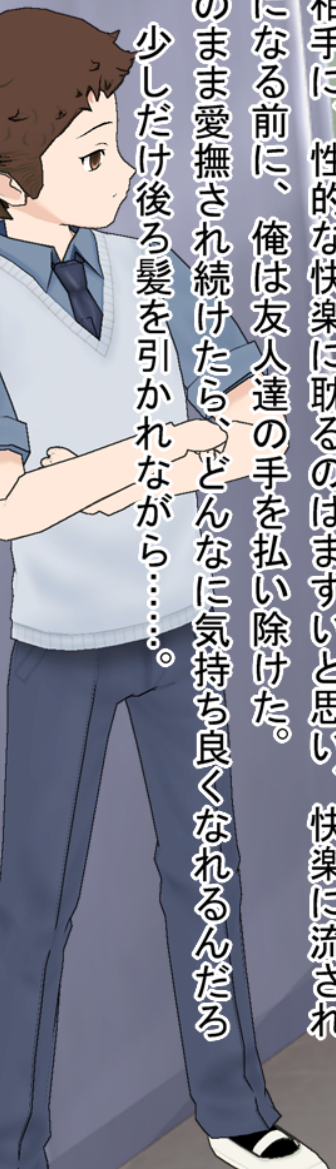
「女になったばっかなんだから、まだどっちもしてないって！」

まあ、この手の質問は俺も気楽に返せるので、問題という程では無い。問題なのは、友人故の気楽さからか、胸を触りたがる連中だ。じゃれ合う感覚で触らせるくらいは構わないと思ひ、うっかり気楽に触らせてしまったのが、まずかった。

(やばい……何だ、これ？ 気持ち……いいじゃん)

Tシャツの上からとはいえ、ノーブラの胸を友人達に揉みしだかれ、俺は仄かな快楽を、覚え始めてしまったのだ。教室の中で友人相手に、性的な快楽に耽るのはまずいと思ひ、快楽に流されそうになる前に、俺は友人達の手を払い除けた。

このまま愛撫され続けたら、どんなに気持ち良くなれるんだらうと、少しだけ後髪を引かれながら……。



休み時間、クラスメイトからのセクハラに悩ませられはしたが、何とか授業が全て終わった後の、帰りのホームルームの時間、俺は山本先生に、遅刻の罰を言い渡された。

「罰として放課後、プールの更衣室を掃除しとけ。そろそろ水泳の授業で使うからな」

水泳部がある高校なら、水泳の授業が始まる前から、水泳部の部員達が利用し、掃除もしているのだろう。だが、この高校は水泳部が部員不足で廃部になった為、水泳の授業が始まる時期には、運の悪い誰かが、更衣室掃除を押し付けられるのだ。

放課後、気が進まぬままプールの更衣室に向かった俺は、裸足でプールサイドを歩きながら、愚痴る。

「プールだけじゃなくて、更衣室の掃除も業者に頼めばいいのに」
プール掃除は危険なので、高校が依頼した業者により行われた。だが、予算を節約する為なのか、業者に頼むのはプールだけで、プールサイドや更衣室は、生徒達が掃除するのである。

風に波打つプールの水面を眺めながら歩いている間に、プールサイドにある更衣室の前に、俺は辿り着いた。



更衣室の中は、大して散らかっても、汚れてもいなかった。
「これなら掃除、楽そうだな」

そう独り言を呟いた直後、ドアが開いて、涼しげな服装に着替えた山本先生が、姿を現した。

「あれ、先生！ どうしたんですか？」

「お前一人じゃ大変だろうから、手伝ってやろうと思ってな」

「これぐらいの状態なら、俺一人でも、すぐに掃除終わりそうだし、先生に手伝って貰わなくても大丈夫ですよ」

「そりゃそうだろ、ここは昨日、一年が掃除したばかりだからな」

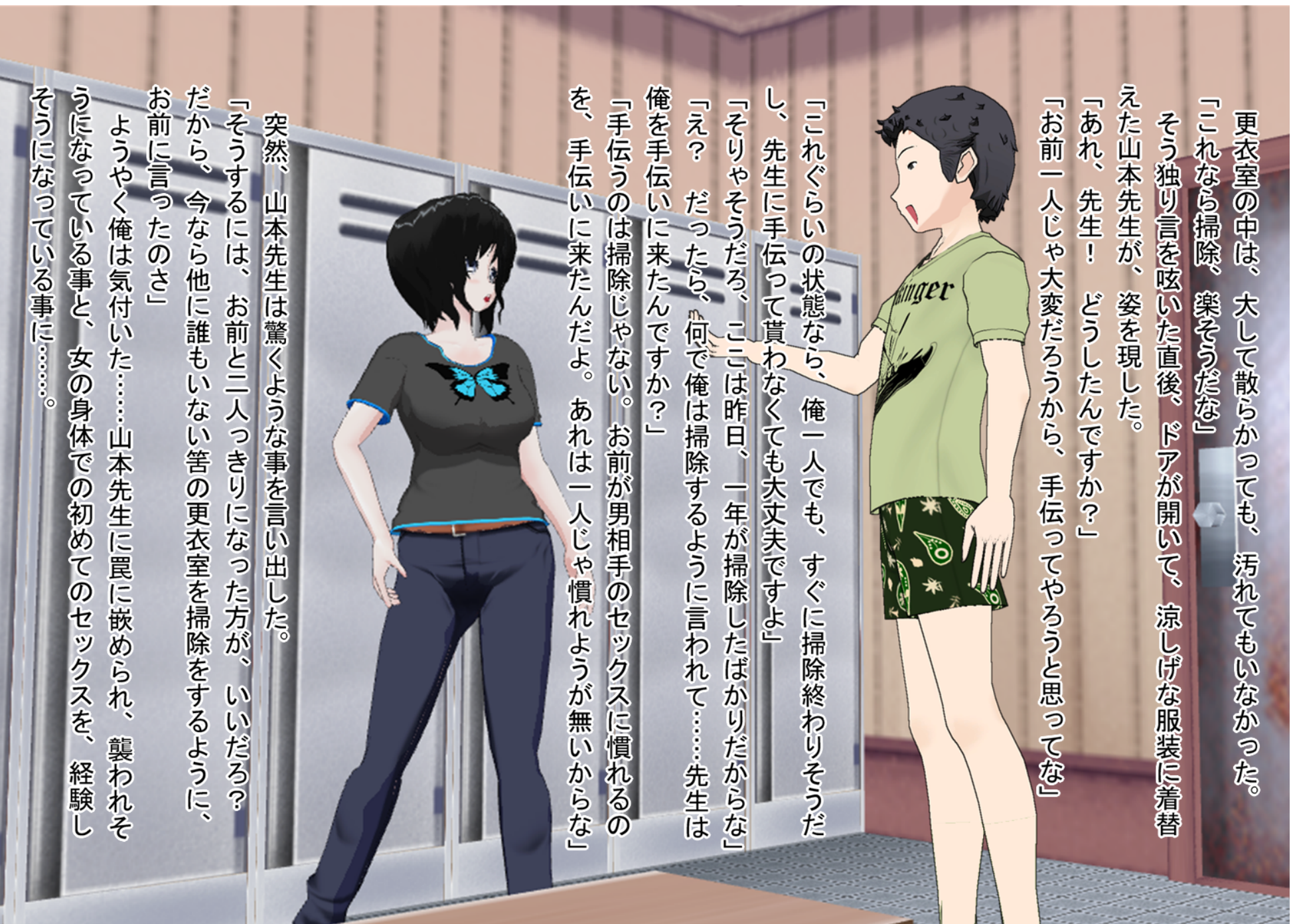
「え？ だったら、何で俺は掃除するように言われて……先生は俺を手伝いに来たんですか？」

「手伝うのは掃除じゃない。お前が男相手のセックスに慣れるのを、手伝いに来たんだよ。あれは一人じゃ慣れようが無いからな」

突然、山本先生は驚くような事を言い出した。

「そうするには、お前と二人っきりになった方が、いいだろ？ だから、今なら他に誰もいない筈の更衣室を掃除をするように、お前に言ったのさ」

ようやく俺は気付いた……山本先生に畏に嵌められ、襲われそうになっている事と、女の身体での初めてのセックスを、経験しそうになっている事に……。



まだ驚き、混乱している俺に、山本先生は襲い掛かってきた。
「や、止めるッ！俺は男だぞ、変態ッ！」
声を張り上げ、山本先生の腕を振り払おうとするが、上手くない。身体が女性化した俺の腕力が、落ちていっているせいだ。
「俺は男だなんて、言える胸じゃないだろ！」
後ろに回り込んだ山本先生は、いやらしげな回調で言い放ちながら、俺の双乳をTシャツの上から、揉みしだく。
心地良い感覚が電流のように、胸から全身に駆け抜け、俺は甘い吐息を漏らしてしまう。

（……教室でクラスメイト達に揉まれた時も、気持ち良かったな。
俺……胸が弱いのかも）

心の中で呟きながら、俺は理性を総動員して、胸を愛撫される心地良さに流されぬように抵抗を続け、声を張り上げる。

「教師が生徒を、襲っていいのかよ？ 警察に通報するぞ！」
しかし、俺の脅し文句は、山本先生には通じない。

「知らないのか？ シナダリヒメを抱く事は、沃姫では善行なんだから、無理矢理抱こうが、犯罪扱いにはならないんだぜ！」
平然とした口調で、山本先生が言い放った事は、本当だ。



何故なら、無理矢理だろうがシナダリヒメを抱こうとする者は、ヨクノヒメに神の力で守られ、警察でも手を出せないからだ。抵抗も脅し文句も通じない以上、俺は為すがままになるしかない。いやらしい手付きで、胸を愛撫される嫌悪感と、嫌な筈なのに感じてしまう快樂に、俺は混乱する。

二分ほど胸への愛撫を楽しんでから、山本先生は俺の前に回り込み、右手で俺の腕を押さえつつ、左手を股間に伸ばす。

山本先生はジーンズの上から、俺の股間に触り始めたのだ。

「ひっ！」

気色悪さに、俺は思わず声を上げてしまう。ジーンズの上からとはいえ、男に股間を触られる不快感は、胸とは次元が違った。

(……それなのに、何で……気持ち良いんだよ?)

本来なら不快なだけの筈なのに、明らかに股間から感じる心地良さ……。男相手に快樂を覚えてしまい、俺は自己嫌悪に陥る。

男から精を集めるシナダリヒメとなった身体は、どうやら俺の意思と無関係に、男からの快樂を貪ろうとするらしい。

すわわ

着衣越しの愛撫に飽きたのか、山本先生は俺のTシャツを脱がそうとし始めた。山本先生が強引にTシャツを剥ぎ取った際の反動で、俺は引き倒され、床に座り込む形になる。

そして、俺の背後に座り込んだ山本先生が、両手を前に回し、掌を乳房に被せる。張りのある乳房の感触を楽しむかのように、両掌で弄ぶ。

「やっぱりノーブラだったか。いい胸してるなあ」

掌で直接、強弱をつけて揉まれるのは、Tシャツ越しよりも、心地良い。揉む合間に、指先で乳首を弄られるのも、快樂のアクセントになる。

(Tシャツの上から……されるより、いいな……じゃねえだろ!)

胸への愛撫の心地良さに、つい流されそうになってしまう自分に、心の中で突っ込みを入れつつ、俺は抗議の声を上げる。

「止める、変態教師ッ! 気持ち悪いってば!」

「気持ち悪い? 気持ち良いの間違いだろ?」

「き……気持ち良い訳無いだろ! 男に胸揉まれて!」

「気持ち悪いなら、どうしてこんなに乳首を硬くしてるんだ?」

耳元で囁きながら、山本先生は指先で、俺の乳首を弄り回す。


先程より、膨らみ……硬くなっている乳首を。

強い快樂の刺激に、思わず俺は……甘い声を漏らしてしまう。

「先生には丸分かりだよ、お前が気持ち良くなってるの」

俺が愛撫に快樂を覚えているのは、既に隠しようが無かった。





数分の間、俺は生乳を愛撫され続けた。途中、耳元に息を吹きかけられたり、耳たぶを舐められたり、甘噛みされたりしつつ。

(やばい……何か、身体が……熱くなってきた)

胸への愛撫に、身体が解され……昂ぶり、熱を持ち始めたのを、俺は自覚する。駄目だと思いつつ、愛撫により与えられる快楽を、楽しんでしまっている身体を、抑えられない。


そんな俺の様子を見て、胸を揉むのは十分だと思ったのだろう、山本先生は俺の胸から手を離すと、俺の前に回り込んで跪く。

(今度は……何をされるんだろう?)

更なる快楽に対する期待が、心の中に湧き上がって来る。嫌悪感や不安感を、快楽への要求が、上回り始めているのだ。


山本先生は、顔を俺の胸に近付けると、右乳首に吸い付く。吸うだけでなく、乳首の周囲の乳房を、舐る。

俺の唇から、吐息が漏れる。乳首を吸われ、乳房を舐められるのは、揉まれる以上に、女として扱われている感覚が強く、俺にとっては女になっているのを思い知らされ、より昂ぶらされてしまいう行為となった。



唇や舌で、俺の胸を楽しんだ後、山本先生は胸から唇を離し、右手を股間に伸ばすと、ジーンズの上から俺の股間を、愛撫する。
(さっき触られた時より、気持ちいい……)
股間への愛撫を、そう感じるのは、さっきより身体が昂ぶっているせいだろう。その現実を、俺は山本先生の言葉で指摘される。「ジーンズ越しでも、少し湿ってるのが分かる……女になってるところを、もう濡らしてるんだな。女になったばかりなのに、随分と淫らなもんだ」
「そんな……濡れてもいないし、淫らでも無いっ!」

顔を赤らめて言い返す、俺のジーンズのボタンに、山本先生は手をかける。
「だったら、ジーンズを脱がして、確認してみようじゃないか!」
「ば、馬鹿! 脱がすなってば!」
俺の抗議を無視し、抵抗を封じ、山本先生は俺のジーンズを、手際良く脱がせ、シヨーツ一枚の姿にしてしまう。



身に着けているのは、母親の買い置きを借りた、ショーツ一枚のみ。太股を開かせられたまま、俺は山本先生に股間を弄られる。「やっぱり、湿ってる……濡らしてるじゃないか」

明らかに事実なので、勝ち誇ったような顔で囁く山本先生に、俺は言い返せない。悔しさと屈辱感を覚えつつ、股間を好きにされるしか無いのだ。

ジーンスより薄いショーツの布地越しなので、指先の動きが、これまでより生々しく感じられる。布地越しに敏感なクリトリスを指先で刺激され、痺れるような甘い感覚に、俺は声を漏らす。

「あ……………」

(男に……こんな事されて、気持ち良くなっちゃ……駄目なのに) 心の中では、そう理性が眩かせるのだが、抗う為の行動を起こせない。愛撫に身を任せたる身体が、理性に逆らうのだ。

そんな俺の様子を見て取ったのか、ショーツ越しの愛撫に飽きたのか、山本先生はどうとう、俺のショーツを脱がしにかかる。「やめて……ください」

言葉では制止するが、身体はショーツを脱がせ易いよう、素直に動く。そして、俺は完全な裸身を、晒す羽目になった。

性器を他者に晒す恥ずかしさに、俺は身を震わせる。

「濡れているが、初物だから……解し足りないか？」

呟きながら、山本先生は俺の股間に手を伸ばし、弄り始める。

陰唇に指を這わせ、膣口を探り当てると、浅く指を沈めて、解れ具合を確認する。

(げ……指、入れられちゃった)

身体の内側を弄られるかのような感覚は、流星に気持ちが悪い。

快楽に流され続けていた俺は、少しだけ理性を取り戻す。



そんな俺の中から、山本先生は指を抜き、クリトリスに移動させると、剥けかけた包皮を剥いて、指先で押さえて震わせる。

「ひっ！」

敏感な部分を直接刺激される、強い快楽に、俺は悲鳴に似た声を上げる。それ程、クリトリスへの愛撫の快感は、強かった。

クリトリスへの刺激への反応を見て、そこを更に攻めるべきだと考えたのだろう。山本先生は指先を股間から離すと、太股の間に四つん這いになって顔を伏せ、股間に顔を埋め……舐め始める。「そんな……そんなとこ、舐めるなっ!」初めてクニリングスをされる驚きと恥ずかしさに、俺は思わず大声を上げてしまう。

だが、陰唇や膣口……クリトリスを舐められた俺は、その心地良さに身をよじり、甘い息を漏らすだけで、抗う声すら上げられなくなる。

(こんな気持ちイイ事されたら……駄目になっちゃう!)

男としての自我が崩れ、駄目になってしまいそうな気がしながら、快楽に身を委ねるのを、俺は止められなかった。

数分の間、股間を舐められ続け、俺の身体は蕩けていた。絶頂こそ迎えてはいなかったが、既に快樂への欲望に飲まれていた。そんな俺の状態を察したのだろう、抗う理性や嫌悪感が残っている間なら、俺がやらないだろう行為を、山本先生は俺に求める。俺の股間に顔を埋めるのを止め立ち上がると、先生は素早く着衣を脱ぎ捨て、全裸になる。

(もう、勃ってる……)

露になった山本先生の股間を見て、俺は心の中で呟く。

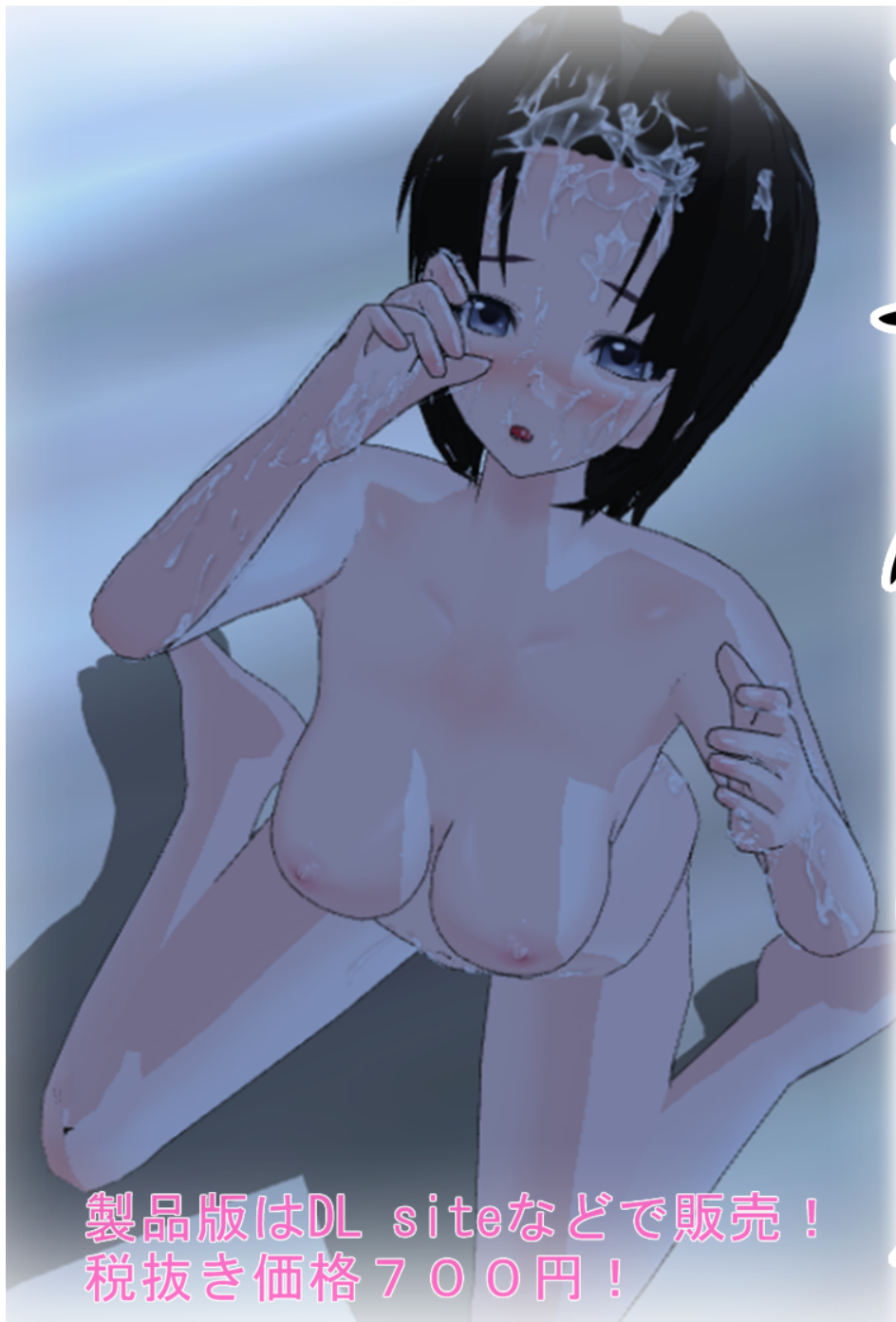
「クンニ楽しんだよな？ だったら、今度は俺を楽しませろよ」にやけた顔で、俺の手を引っ張り上体を起こすと、俺の目の前に立つ。俺の顔の前に、いきり立ったペニスを突き付けるように。フェラチオを求めている山本先生の意図を、俺は察する。

女としての快樂に蕩けつつある俺は、仄かな嫌悪感を覚えつつも、既にペニスを快樂を与えられる存在だと、認識していた。

おずおずとはあるが、俺は唇を開き、手を添えたペニスに口をつける。すえた臭いに嫌悪感を覚えるが、俺はペニスを銜える。(チンチン……銜えちゃった)

そんな自分にシヨックを受けつつも、俺はアダルトビデオなどで目にしたフェラチオの真似を、始めてみる。ペニスの先端や竿を舐めたり、頭を前後に動かして刺激したりしてみる。





シナダミートX

製品版はDL siteなどで販売！
税抜き価格700円！



(C)ヨドモは読んじゃダメ！
亜蘭澄惟 2014

○収録されているCGについて

この作品は、3D少女カスタムエボリューションで作成したCGを、主に使用し作成され、CG集の中には、同じポーズや体位を使用しているCGが含まれています（基本、キャラのデザインやアングル、場面は変わっている場合が殆どですが）。

そういった、同じ体位やポーズのCGを、水増し要素だと感じる人の場合、そういったCGが多いCG集を買うと、後悔する羽目になるのは明らかです。故に、そのような後悔をするような事態を避けられるように、全てのCGの体位やポーズが確認可能なサムネイルを、体験版に載せています。

購入前に体験版掲載のサムネイルをチェックし、水増しだと感じて後悔する羽目になりそうか、そうでないか確認した上で、購入を検討して下さい。

一応、制作者側の基準でのCG枚数は、以下の通りとなります。

CG総数、237枚

着衣のまま触れる程度（キスも含む）10枚以上（ファイル名末尾がt）

身体の接触は無いヌード 10枚以上（ファイル名末尾がn）

セックスと前戯後戯 100枚以上（ファイル名末尾がh）

残りはストーリーを構成する為の、テキスト付きCGです。

※次ページより、全収録CGのサムネイルとなります。ちなみにサムネイルは、CGに添えられたテキストの総量の、大雑把な確認にも使用が可能です。



001



002



003



004



005



006



007



008



009t



010



011



012t



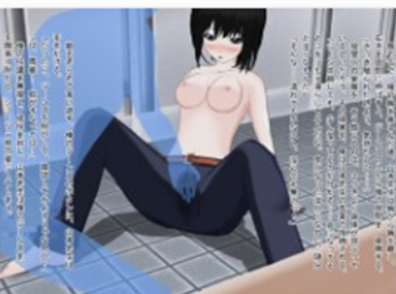
013t



014h



015h



016h



017h



018h



019h



020h



021h



022h



023h



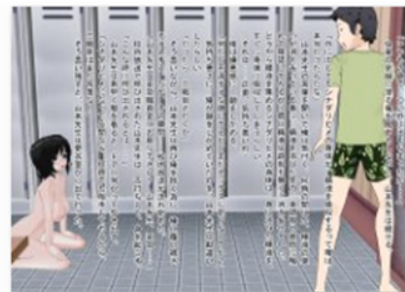
024h



025h



026h



027



028



029



030



031



032



033



034



035



036



037t



038t



039h



040h



041h



042



043



044t



045



046



047



048t



049t



050h



051h



052h



053



054



055n



056h



057h



058h



059h



060h



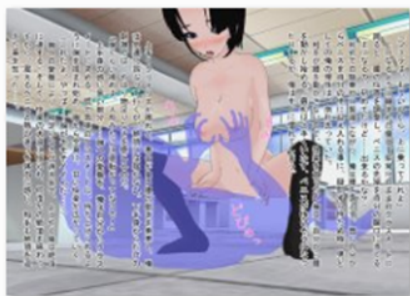
061h



062h



063h

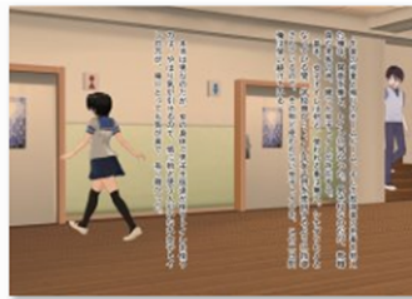


064h

確認用サムネイル



065n



066



067



068



069



070h



071h



072h



073h



074h



075h



076



077h



078h



079h



080



081h



082h



083h



084h



085h



086h



087h



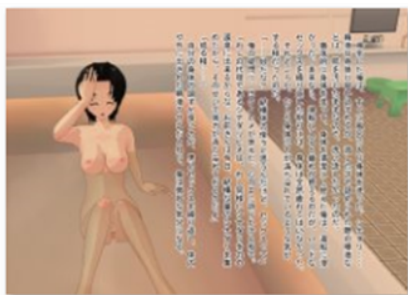
088h



089h



090



091n



092n



093



094



095h



096h

確認用サムネイル



097h



098h



099h



100h



101h



102h



103h



104h



105h



106h



107h



108n



109h



110



111



112



113



114



115



116t



117t



118h



119h



120h



121



122



123h



124h



125h



126h



127h



128



129



130



131h



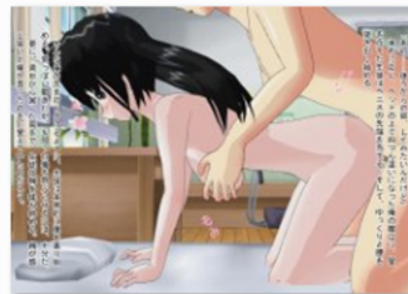
132h



133h



134h



135h



136h



137h



138h



139h



140h



141n



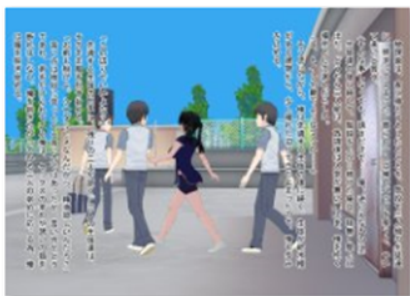
142



143t



144h



145



146h



147h



148h



149h



150h



151



152



153n



154n



155h



156h



157h



158h



159h



160h

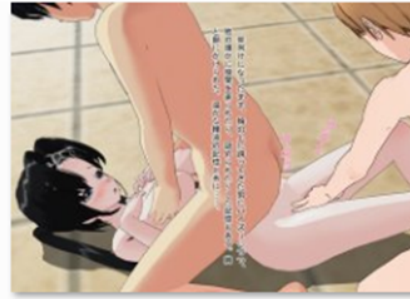
確認用サムネイル



161h



162h



163h



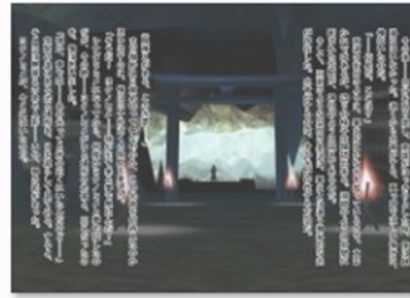
164h



165h



166n



167



168



169



170



171n



172h



173h



174h



175h



176h

確認用サムネイル



177h



178h



179h



180h



181h



182h



183h



184h



185h



186h



187h



188h



189h



190h



191n



192



193



194



195



196



197



198



199



200



201



202



203



204h



205h



206h



207h



208h

確認用サムネイル



209



210



211n



212h



213h



214h



215h



216h



217h



218



219



220



221



222



223



224



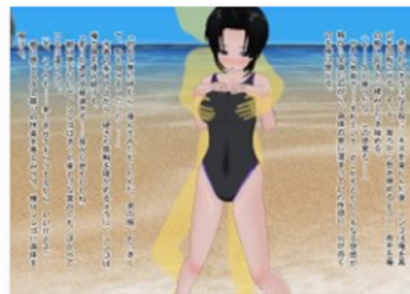
225



226



227t



228t



229h



230h



231h



232h



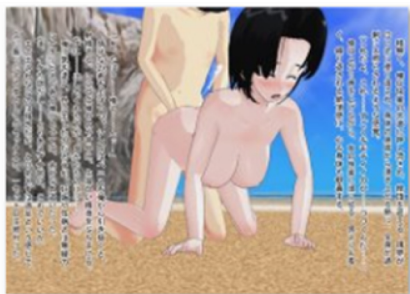
233h



234h



235h



236h



237h



奥付



表紙